
Last words

斎藤一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last words

【Nコード】

N8466Y

【作者名】

斎藤一樹

【あらすじ】

学校一の美少女と噂される、白鳥百合。生まれつき心臓が悪い彼女は、平凡な僕の恋人だった……。

L a s t W o r d s - 0 1 (前 書 き)

一年ぐらい前に書いた作品（未公開）のリメイク版です。短期集中連載で、2011年中に完結する予定です。

世界観をDailyシリーズと共有しており、別のDailyシリーズにもこの作品のキャラが登場します。

三年前、僕の大切な女の子が死んでしまった。彼女は僕にとって掛け替えの無い親友であり、幼なじみであり、初恋の相手でもあり、そして、

……僕の、恋人だった。

白鳥百合という名前の彼女は、生まれつき心臓が弱く、体育の授業は基本的にいつも見学していた。

彼女はその年代の女の子にしては珍しく、可愛いというよりも綺麗といった形容が似合う容姿をしていた。身体が弱い、ということも相まって、どこか儂げな印象があった。

そういったわけもあり、また彼女は誰にでも優しくだったので、彼女はクラスのアイドルのような存在だった。

中学生にもなると、皆異性の事を意識し始める。彼女に告白した男子は数え切れない程いたが（学年の男子の半分ぐらいが告白したのではないだろうか）、彼女が誰かと付き合っているという噂を聞いたものは誰もいなかった。

そんなある日、僕は彼女と日直で一緒になった。その日の放課後、僕は彼女と二人切りで黒板掃除（日直の仕事）をやっていた。教室には、僕たち二人以外には誰も居ない。

彼女は僕に色々と話し掛けてくれる。でも僕は照れ臭くて、更に緊張も手伝って「ああ」とか「うん」とか、無愛想な答えしか返すことが出来なかった。

程なくして、黒板掃除は終わった。僕は黒板消しを置いて、自分の席へ鞆を取りに行こうとした。

そんな時だった。僕の背中に、声が投げ掛けられた。

「…ねえ、あたしと話していて、楽しくなかった？」

その一言に、僕は内心とても慌てた。そんなつもりはない、そう

言おうとした。

しかし、白鳥は僕の言葉を聞かず、更にまた僕に言葉を投げ掛けた。

「…ねえ、もしかして伊達君って、あたしの事、……キライ？」

「…そんな事は無い！」

反射的にそう、言葉が口を突いて出ていた。少し、怒鳴るような口調になってしまった。しかし、とっさに出た言葉ではあったが、その実、この言葉は紛れもなく僕の本心である。

「じゃあ、……あたしのこと、」

白鳥は、その先を口にすることを躊躇うかのように言葉を切り、そして決意したのか、更に言葉を重ねる。

「……………好き？」

背中越しに見遣ると、彼女は心細げな、そして不安そうな表情でこちらを見ていた。その姿は、拒絶されることを恐れているかのよう。

振り返り、僕は白鳥に向き直った。嫌いである訳がない。彼女がアイドルのごとき扱いを受けていたのは前に述べた通りである。勿論僕も、彼女に告白こそしていないものの、彼女の事が好きだった。だから、彼女に向き直り、その目を見据えて、はっきりと告げる。「僕は、白鳥のことが……好きだ」

たぶんこれは、いつまでも決して揺らがない想い。それを言葉に乗せて、彼女へと贈る。

「だ、伊達君！」

リンゴ飴のように真っ赤になった顔を落ち着けるかのように深呼吸をすると、白鳥は僕の名を呼んだ。そして。

「あたしも、その、伊達君のことが好きです。だから……あたしと、つき合って下さいっ！」

……頭の中、ショートするかと思った。

翌日。朝起きると、すぐに昨日の放課後のことを思い出した。知

らず、頬が熱を持った。取り敢えずベッドから抜け出し、着替えを始める。

白鳥からの告白は、もちろんOKした。

帰り道は、一緒に並んで歩いた。やっぱり相変わらず僕は照れくさくって、少し不愛想になってしまったけれど、それは彼女も同じみたいで、あまり僕達は会話をしなかった。でも、お互いの手は指と指とを絡ませ合い、しっかりと握られていた。

そんな、どこか気恥ずかしくて、それでもどこか胸の奥が暖かくなるような心地よさのある沈黙の中で、僕たちは、少なくとも僕は、確かに幸せだったんだ。

L a s t W o r d s - 0 2 (前書き)

キリのいいところで区切ったので、今回は結構短いです。

彼女に告白されてから、あつという間に二ヶ月が経過した。

その間に僕と彼女は、お互いの家に遊びに行ったり動物園に行ったりと、そんな楽しい日々を過ごしていた。

何の根拠もなかったけど、そんな楽しい日々が、いつまでも続いていくと思っていた。ううん、その幸せが続くことが当然のことだ、と思っていた。

だから、僕は気が付かなかった……いや違う、気が付かなかったんじゃない、気が付こうとしなかったんだ。

そんな幸せな日常の終焉を告げる足音が、少しずつ迫っていることに。

その日は、よく晴れた日曜日だった。僕と白鳥は近くの水族館に行き、例によってデート。水槽の壁の近くまで泳いで寄ってきたウミガメにはしゃいだり、アシカショーに興奮したりと、白鳥は終始楽しげだった。そして、その笑顔をすぐそばで見続けていることが出来た僕もまた、このデートを楽しんでいた。

日が傾き始めてから数時間が経ち、空が朱に染まり始めた頃。

「また明日、学校で」

白鳥の家の玄関前まで彼女を送って、別れ際にこう言つと、

「今日はありがとうね、伊達君」

語尾にハートマークが付きそうな声でそう言つて、彼女は僕の唇に、そつとキスをした。

体感時間で一分間ほど。多分、実際にはそんなに長くなかったの
だろう。

彼女も恥ずかしかったのか、頬を朱く染めながら、照れ隠しのよ
うに

「じゃ、じゃあ、また明日ね！」

と言って、タタツと小走りに家の中に入って行ってしまった。

彼女が去って行った後も、しばらく僕は呆然と立ち尽くしていた。

「……今のは」

呟きつつ、唇の、先ほど触れ合わされた場所を、そっと指で押さ
えた。

「……やっぱり、ファーストキス……？」

ファーストキスはレモン味、とか聞くけれど、緊張で味わうどこ
ろじゃあなかった。

L a s t W o r d s - 0 2 (後 書 き)

次回、物語が動きます。

その日の晩、彼女の家から電話があった。

その電話に出たのは母さんだった。そして、電話をしている母さんの顔は、傍目にも判るぐらいにサアア…と青ざめていくのが見えた。より正確に言うのなら、青ざめるといふよりも白くなっていく感じだった。

電話を切ってから、母さんは僕を呼び、静かにこう告げた。

「落ち着いて聞いてね」

そこで母さんは、自らをも落ち着けるかのように深呼吸をした。

そして、言葉を続ける。

「百合ちゃんが急に心臓発作で倒れて、」

救急車で搬送されたって……。

いつしか、外は激しい雨が降り始めていた……。

僕の中で、時間が止まった。まだ母さんは何か僕に言っていたけれど、全く耳に入ってこなかった。頭の中で、シンゾウホツサヤキウキウシャデハンソウといった言葉が、木霊していた。

それから先、5分間程の記憶が、僕には無い。

気が付いたら、僕は車に乗っていた。後になって聞いたことだが、あの後僕は一言も発さず、母の言うがままに出かける仕度をし、車に乗り込んだのだと言う。

その目は虚ろで、さながら生ける屍のようだったらしい。

車が病院に到着した。

車から降りると僕と母はまず玄関^{エントランス}に向かう。白鳥の治療はもう終

わっついていて、彼女は既に一人部屋へと移されたらしい。僕たちは、早足で彼女のいる部屋へと向かう。

彼女は眠っていた。僕はそう思った。しかし現実はず違った。

彼女はまだ、意識が戻らないのだという。

呼びかけたら意識が戻ることもある、という医者言葉を聞いた僕は、早速彼女へと呼びかけ始める。

呼びかけ始めてから10分が経過した。

僕と白鳥の親達は僕に気を遣ったのか、今はこの病室にいない。

僕と彼女を二人きりにしてくれたらしい。

しかし、いくら呼び掛けても彼女は目を醒まそうとしない。

少し諦めそうになる。その時、僕はふとある事を思い出した。

(そう言えば、眠り姫ってあったよな……。あれってどうやってお姫様を起こしたんだっけ?……思い出した。王子様のキスだ。……そういえば、白雪姫もキスそれで生き返ったんだよな……。……試してみようかな……。……?いやでも、なんかそれは色々倫理的にマズイ気が……。……でもやっぱり、可能性があるのでなら、僕はそれに賭けてみようか)

緊張しつつ、周りをキョロキョロと見る。当然だが誰もいなかった。うん、誰かに見られながらキスをする、というのは中々に気恥ずかしいものがあると思う。

一通り確かめてから、僕は彼女の顔へと顔を近づけていく。こんなカタチで再びキスをする事になるとは、思ってもみなかった。

僕と彼女との距離が、30センチ、25センチ、20センチ……。次第に近付いていく。そして。

僕と白鳥の、唇が触れ合う。

しかし、彼女は目を醒まそうとしない。

やっぱり駄目なのか、と諦めかけ、俯いたその時、

びくり

と、彼女の指が微かに動いた気がした。
僕はハッとして、彼女のことを見る。

奇蹟が起こった。

白鳥はうつすらと目を開け、僕の顔を見るとハッとしたように目を見開いた。

その時の彼女の顔を、僕ははっきりと覚えていない。僕はその時、泣いていたから。

L a s t
W o r d s - 0 3 (後書き)

まだ終わりません。次回は(次回も?) ちょっと重めです。

L a s t
W o r d s - 0 4 (前書き)

主人公達の設定年齢を変更しました！それに伴い、01を編集しました。

僕が、白鳥が目覚めたことを親達に知らせに行こうとすると、彼女が僕のシャツの裾を引っ張り、縋るような上目使いでこう言った。「少しの間でいいから、二人切りでいて……」
わかったよ、と僕は呟き、先程まで座っていたパイプ椅子へと再び腰を下ろす。

どうも僕は白鳥に甘いようだ。彼女からのお願いを断ることが出来た記憶が無い。

僕が座るのを待ってから、白鳥はポツポツと話し始めた。

「……あたし、怖い。今日みたいに、いつ発作が起こって死んじゃうか分からない。それは一年後かも知れないし、一ヶ月後かも知れない、もしかすると明日かも知れないわ。……ねえ、何のためにあたしは生きているの？ どうせなら、もっと丈夫な身体に生まれたかったわよ！ いつも皆が楽しそうに鬼ごっこやドッジボールをやっている、いつだってあたしは見てるだけ。体育の授業だって、運動会だってそうよ。あたしだって参加したかった！

……ねえ、あたしは、何のために生きてるの？ あたしに、生きていく意味なんてあるの？」

彼女の言葉は、次第に慟哭へと変わっていった。心の奥深くから感情と言葉を搾り出して吐き捨てる様に、彼女は言葉を紡ぎ続ける。その表情は、とても辛そうで、苦しげで、どこか淋しげで。今にも泣きそうなのに、必死に涙を堪えていて。今更になって、僕は彼女の事を理解し切れていなかったんだと思い知らされる。思えば、白鳥がこんな風に感情を剥き出しにしたのは初めてかもしれない。今までの彼女は、どこか皆に対して遠慮しているような感じで、それは僕も例外では無かった様に思う。

そんな彼女を見ていられなくて、それでも僕には何も言えなくて

だって、白鳥が味わった苦しみや悲しみは、僕には分からないから。理解することは出来る。それでも、決して分かることは無い。そんな僕は、軽々しく彼女に言葉なんて掛けられない。

だから、僕はそんな白鳥を優しく抱きしめた。言葉より先に、身体が動いた。目の前で大好きな女の子が泣きそうになっていて、何もしないなんて、男のする事じゃ無い。そうだろ？

もう、泣いていいんだ。無理をして、意地張って笑ってなくてもいいんだよ。僕には何も出来ないけど、それでもこの胸ぐらいたら貸してやれる。だから、気が済むまで泣いていいんだ。

そう囁くと、白鳥は静かに、次第に大きな声で泣き始めた。

白鳥の泣き声が少し静かになって来たので、口下手なりに想いを伝えることにした。まあ、上手くいくかどうかは疑問ではあるが。

「なあ、白鳥。僕は、思うんだ。どんな人生にも、意味はあるって。僕はまだ子供だから、世間を知らないからそんな事が言えるのかもしれないし、所詮は耳触りのいい綺麗事なのかもしれない。いや、多分そうなんだと思う」

ここで一旦言葉を切り、唇を湿らせる。普段言いなれない長台詞なんて言うから、内心は大分緊張している。それでも、それを顔に出さないようにして口を開く。さあ、ここからが正念場だ。

「それでも僕はあえて言う。どんな人生にも意味はある。生きる意味がわからないなら、それを見つげるために生きる。そんなもの、これから見つけていけばいい。一人では無理なら、僕が隣にいてやる。二人でもダメなら、音也とかも巻き込もう。きつとあいつなら巻き込まれてくれるさ」

努めて明るく、白鳥に言う。しかし、白鳥は言った。

「でも、あたしが居たって、今日みたいに迷惑をかけるだけよ。あたしなんか、居ない方がいいに決まって」

白鳥の言葉を遮って、僕は怒気を押し殺して言う。「……いい加減にしないと、そろそろ僕は怒るよ、白鳥？」

「……………え……………？」

何を言われたのか分からないらしく、きょとんとした顔で彼女は僕を見る。

「居ない方がいい、だって？ふざけるなよ、僕は白鳥に居て欲しいんだ。未だ分からないのならもっとはっきり言ってやる。……僕は君が好きだ。だから、僕は白鳥キミに居て欲しいんだ」

二度と、言わないからな……………。

そう、小声でこっそりと呟く。

ああ、恥ずかしい。勢いで言ってしまったが、落ち着いて考えてみるとかなりとんでもない、大胆な台詞を言ってしまった気がする。ああやだよだ、こういうのは柄じゃあないんだ。

白鳥は黙り込む。そして、再びポツリと言う。

「伊達君…、あたし、怖い。いつ死んじゃうか分からない事もそうだけど、死んで、誰からも忘れられてしまつていくのが怖い……」

見ると、白鳥の方は細かく震えていた。そして、雫が一滴、落ちて布団に滲み、そのまま消えていった。

「忘れるものか。例え世界で、他の全ての人が君を忘れてしまったとしても。僕だけは、君の事を決して忘れない」

それを見て、口を突いて出た言葉。僕は常々、自分の事を口下手だと思っていたが、こういう時にはちゃんと言葉が出るらしい。

そんな僕の言葉を聞き、彼女は少し恥ずかしくなったのか、

「…あ、ありがとう……」 頬を朱く染め、消え入りそうな声で言った。そんな可愛いらしい白鳥に僕も何だか照れ臭くなり、

「え、えっと、じゃあ僕、白鳥が起きた事知らせてくる」

と言い残し、席を立つ。すると、また白鳥に裾を引っ張られた。

今度は何だろう？

白鳥は俯いたまま、恥ずかしいのか少し小さな声で言った。

「…えっと、伊達くん？その、あたしの我が儘、聞いて貰っても…

…いいかな？」

これは又、珍しい。

「内容次第だな」

少し意地悪を言ってみた。

「えっ…と、その……。あたしのこと、これからは苗字じゃなくて、名前で呼んで欲しいかな、って……」

めげずに頑張つて最後まで言い切った。

……なるほど、この程度の可愛い我が儘ならお安い御用だ。

「分かったよ。これでいいか？……百合」

と、思っていた時期が僕にもありました。いや、名前で呼ぶのっ

て結構恥ずかしい。

「……………うんっ！」

それを聞き、白鳥は頬を染めつつも、幸せそうな満面の笑みで頷いたのだった。そして、それを見た僕も又、頬の緩みを押さえることが出来なかった。

しばらくして、漸く僕は親を呼びに行った。白と……………百合が目覚めたことを知らせるために。

病室を出る時に背中越しに聞いた、小さな「ありがとう」の声を、僕は今も覚えている。

先程まで激しく降っていた雨は、既に止んでいた。

それから一年後のある晴れた日、白鳥は死んだ。

L a s t W o r d s - 0 6 (前書き)

多分、今までで一番短いんじゃないでしょうか、今回。

何も、出来なかった

後にはそんな無力感と、とても大きな喪失感だけが残った。
こうして僕は、大切な人を喪なった。

それから、2年経った。

今、僕は高校一年生になった。

今もまだ僕の心には、白鳥の死が、抜けることの無い刺となって刺さっている。

多分、僕はこれからもずっと、この刺の痛みを抱え、背負って行くのだろう。

でも、これはこれで悪くないと思う。白鳥のことを、忘れずに済むのならば……。

もっと他に、何か僕に出来る事はなかったのだろうか。もちろん、あの頃の僕に何も出来る筈がないという事は、頭の中では理解している。それでもやはり、そう思ってしまう。

白鳥を喪つてから、僕の何かは壊れてしまった。成績は少しずつ悪くなっていった。高校に入学した今も、サボる事がしばしばある。グレたわけではない。ただ、何事にも真面目になれないだけだ。

無気力、と言ってもいい。勉強する意味が、目的が、僕には無いんだ。

L a s t W o r d s - 0 7 (前書き)

おまたせしました！

今話から、ラストのクライマックスに向けて一直線ですよ。

そんなある日の下校中、僕に一人の女子高生が声を掛けてきた。制服から判断すると、この近くにある高校のようだ。

「ねえ、そのキミ」

最初、僕に言われたのだと思わなかったから、そのまま通り過ぎてしまった。しかし、彼女は諦めずに

「ちよ、ちよつと！キミよ、キミ！」

と言いながら、僕の肩を掴んできた。僕は半目になって言った。

「えつと…要するに逆ナンってやつですか……？」

「違うわよ!？」

「あいにくとナンパとか、間に合ってますんで……」

「こつちの話を聞いてよ、伊達君！」

思わずその時、僕は不覚にもハツとしてしまった。僕の名前を呼んだその声やイントネーションが、僕が知っている彼女によく似ていたから。

「……………」

いや、感傷に浸っている場合じゃない。だって、彼女は

と云うか。

「何故、貴女は僕の名前を知っているんですか？どこかでお会いしました？」

言外に、「貴女は誰だ？」という意味を込める。すると、彼女は首をかしげてこう言った。

「あら？覚えてないの？」

あいにくと全く記憶にない。

「小さい頃は一緒にお風呂にも入ったのに」

「本気ですか！？」

つい突っ込みを入れてしまった。というか、そんな記憶を忘れてしまっている自分の脳を恨む。

「まあ、嘘よ」

「嘘かよ！」

なんとなく予想出来ていた事ではあるのだけれど。

「で、結局貴女は誰なんです？」

聞くと、彼女は名乗った。

「本当に覚えてないの？私は白鳥杏子しろとりあんず。百合ちゃんの姉よ、伊達君

二年前から止まっていた時間が、再び動き出した。そんな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8466y/>

Last words

2011年12月21日16時49分発行